
神様が落としまして.....

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様が落としまして……

【Nコード】

N3903Z

【作者名】

夢追い人

【あらすじ】

俺の家族は少し変だった。

(よく覚えていない) 両親は海外を飛び回り、祖父はすごい豪傑、祖母はめっちゃくちゃ若い、姉は才能ある美少女……弟の俺だけ容姿も才能も平凡だ。

でも、祖母と姉はいい人なので、偶然こういう家に生まれたからしかたないと納得することにした。

ある日、爺さんに興味本位で尋ねたことからこの世界の常識を知っ

てしまう……が、割とどうでもよかったです。

世間に疎くて馴染み難いけど、俺は今日も頑張っ
て生きてます。

春の公園で拾いモノ（前書き）

駄文ですが、読んで頂けたら幸いです。

主人公の特異さは徐々に引き出していきたいと思います。
今回だけでも十分おもしろいですが……

春の公園で拾いモノ

彼はとある街から少し離れた山の近くの屋敷に生まれた。

金持ちの豪邸というわけではなく、古くてでかいだけの忍者屋敷のような家である。実際、隠し扉や秘密の抜け道といった仕掛けもあるらしい。

物心ついた頃には彼の両親は世界を飛び回りついていたため、あまり顔を覚えていなかった。

彼が世話になったのは祖父母と姉である。

祖父は早くから厳しい鍛錬を課し、祖母には母代りに世話になり、七つ程上の姉には友達代わりによく遊んでもらっていた。

祖父は、頭が禿げ（本人は丸めただけと言い張る）で、がっしりした体格の老いを感じさせない老人である。

現在は春の少し肌寒い時季だが、甚平姿で孫である彼を扱って笑っている。

全力を彼には見せたことがないが、山から下りてきた暴れ猪を一撃で仕留めていたのは記憶に新しい。

ふと疑問に思った彼は体を起こし、同じく居間で寛ぐ祖父に祖母は後妻なのかを尋ねるが、

「馬鹿を言うでないわ！ 儂は婆さん一筋じゃ！！」
大声で怒鳴り返された。

この屋敷が住宅地にあったなら近所迷惑になっただろう。

その時、お茶の入った湯呑が乗った盆を一旦床に置いた誰かが、障子を開けて入ってきた。

黒の長髪を簪で纏めたかわいらしい女性で着物を着ている。その容姿から判断すると、20代前半だろうか？

「あらあら、お爺さん、照れちゃいますよ〜」

祖母だった。

仄かに赤く染めた頬に手を当てて、爺さんの言葉に照れている。彼は至近距離で怒鳴られたために、キーンと耳鳴りがしており、婆さんの言葉は全く聞こえていなかった。

爺さんたちはお互いを褒め合い、昔の話まで引つ張り出して盛り上がっていく。

……しばらくすると、ジーツと観察されているのに気付いた爺さんたちはオホンと一つ間を置き、彼に居住まいを直して向き直る。

「それで、何で急にそんなことを聞いたんじゃ？」

「だって、婆さん若くてキレイだから……」

「あらあら、真司しんじったら、わたしを口説いてるのかしら？ おませさんなんだから」

「真司！ 貴様、孫の分際で儂の婆さんに手を出そうとするとは…

…！」

「爺さん、落ち着いて。俺はただの孫だから。婆さんを恋愛対象に見ていないから」

婆さんが変な解釈をしてしまったために、爺さんが再び怒り出してしまふ。というか、爺さんは幼い孫に遠慮なく怒りすぎだ。

「で、婆さんがそんなに若いのは何で？」

「あらあら、それはわたしが『神様の落し物』を拾ったからよ」

この世界には『神様の落し物』（今では主に『ギフト』と言われる）と呼ばれるものがある。これは普通ではありえない『力』のことだ。何時、何処で、誰が（何が）、どのような力を得るのか分からず、昔の人は神様が天から落としてしまったのではないかと考え、そう呼ばれたした。

この力は現代の科学でも解明できておらず、多くの研究者たちの頭を悩ませている。

婆さんが拾ったのは、名前を付けるなら『外見の若さを保つ力』と

いった所だ。本人が言うには、年々体の衰えは感じているとのこと。それでも、その力は人々には十分魅力的なので、数多くの報道陣や研究者、犯罪者が押し寄せてきたらしいが、爺さんがことごとく蹴散らしたらしい。ただ、どうしてもしつこかったため、一番信用できそうな研究者に常識の範囲内で検査させたら、結局は婆さんだけに作用する力だったみたいで、皆ガツカリしていたと婆さんは笑って話す。

そんな婆さんの隣にいる爺さんは、その時のことを思い出して腹を立てている。

「ふーん。それだけかわいかったら婆さん昔からモテたんじゃないの？」

「おっ！ 真司も婆さんの魅力に気づいておったか？ じゃが、儂の婆さんに手を出すのは許さん」

「はいはい……それで、どうだったの？ 爺さんよりいい人いっぱいいたんじゃない？」

「あらあら、わたしにはお爺さんだけでしたよ。わたしは弱い（・）ですからね？」

真司はテレビや新聞をあんまり見なかったので気付いていなかったが、この世界では、一般的に強い女性が好かれる。強い女性というのは腕力、技術、『神様の落し物』などを合わせた戦闘力の高い女性と言い換えてもいい。かわいさや美しさというのは女性の価値を高める効果は薄い。

実際、体のごつくて乱暴でも、強ければ人気がある。それに、ここ近年増加した『神様の落し物』の戦闘系の力はそういった女性が比較的拾いやすいというのが統計的に分かってきている。

男は基本的に女性より弱く、『神様の落し物』を拾った人は過去を見てほとんどいないため、互いに激しい自己主張を繰り広げて強い女性の気を引くのが大変だと多くの男は語っている。まるで動物

の社会である。

爺さんは婆さんと幼馴染だった上に、感性が一般の人と異なっていたようで、強い女性の気を引こうとしないで婆さんとずっと一緒だったとか。

「僕の両親は見る目がなくての……。婆さんと一緒に結婚すると言いに行ったら、あの子はやめて強い女と結婚しろ、と言ってきたんじゃないよ。最終的には、二人とも真剣勝負で決着をつけてやったわ！」

「ふふ……。あの時のお爺さんはとても恰好よかったですよ。わたしのために命がけで戦ってくれて。もう惚れ直しちゃいました」

「わはははは！ 愛！ 愛の力じゃよ！！」

「へー……。だから見かけの度に爺さんの後ろで睨んでるんだ……。真司が言ったその言葉に、爺さんは腕を組んだ高笑いの状態で、婆さんは照れて赤くなっている頬を両手で押さえた笑顔のままの状態で固まってしまった。

真司が爺さんの背後に視線を向けると、爺さんによく似ているが、髪があり、厳格な雰囲気の人と、キツイ目つきの極道の姐さんのような人がいる。

下に視線を向けると、どちらも足は無い。

あ、目が合った……

とりあえず、真司がその二人に一礼すると、向こうも慌てて礼を返してくる。

「真司……まさか!？」

「うん、爺さんの両親だと思うよ。幽霊だけど」

「あ、あらあら……」

真司の発言後、爺さんは「今度こそ地獄に落としてやるわー!!」と手当たり次第に殴る蹴るを繰り返す始め、婆さんは「あらあら、

まあまあ、どうしましょ……」といつて慌てふためく。
爺さんは空気を破裂させたり、切り裂いたりしているが、人的被害は出ていない。

そんな二人を放置して、真司は曾祖父母に向き直る。

「爺さんが婆さんと結婚したのが気に食わなかったのでしょうか、あなた方が最終的に認めてくれたおかげで俺はこうして生まれました。ありがとうございます」

俺は姿勢を正して、頭を下げ、礼を述べる。言葉が通じるか分からなかったが、どうやら理解できたようで、曾祖父は目を軽く見開き、（おそらく）フンツと鼻を鳴らして消えて逝った。

曾祖母は少し目元を緩ませて俺の頭を一撫でし、同じように消えて逝った。

述べた言葉は本心ではあったが、真司としては幽霊が自分の家に居座るのはあまり心地よくないため、駄目元でやってみただけである。どうやら功を奏したようだが……

真司が安堵の溜め息を吐いて周りを見わたすと、今だに暴れ回る爺さんによって障子や襖、床の畳から天井まであちこち壊され、湯呑も倒れただけでなく粉々になっていた。

……婆さんは何故か一生懸命にお経を唱えている。

仮にも義理の両親にその仕打ちはあんまりではないだろうか？ それに、途中思いつくためにつかえたり、間延びしたしゃべり方なので効果は見込めないだろう。

「婆さん、もう二人は逝ったよ」

「え〜つと、え〜つとぉ……え？ あらあら、本当？ やっぱり幽霊さんにはお経よね〜」

両手をポンと合わせて、首と一緒に可愛らしく傾けながら何やら物騒なことを言う婆さんを放置した真司は爺さんを止める。

「（効いてなかったけど……）爺さんも止まって。もう逝ったから」

「かああああ……ん？ 何と！ とうとう俺の一撃は幽霊をも葬り去ったか！？ さすが俺！ ぶわっはっはっはっはっは！」

爺さんは破壊されてゴミとなった木片や紙などの上に立って気を静めていたが、真司の言葉を自分の都合のいいように解釈してご機嫌だ。

真司からすれば滑稽以外の何物でもない。いや、確かにそれだけ凄まじい業を持っているのを否定はできないが……

この爺さんを常日頃から見ている真司には、男が弱いという一般常識が嘘にしか思えないだろう。

爺さんたちは真司が幽霊を見えることを忘れてしまったのか、何が一番幽霊に効いたのか検討し始める。一人、真司は破れた障子の向こうに広がる青空を、天を見上げる。

「あの二人が新しい人生を楽しめますように……」

突然の幽霊騒ぎからしばらくすると、玄関の方から古い扉の開く音がする。それと「ただいま……」と小さい女の子の声が聞こえてきた。

真司はいつの間にか二人の世界に入って互いを褒め合う爺さんたちをそのままに、玄関へと向かう。

そこに居たのは、背の真ん中くらいまで伸ばした黒髪のを赤いリボンで結んでまとめた女の子だ。

赤のランドセルを背負っており、小学校から帰ってきたのだとわかる。靴を揃えるために真司からは背中しか見えない。

「姉さん、お帰り。」

真司が声をかけると姉の零れいが声の聞こえた方を向く。幼いながらも整った顔をしており、婆さんの面影がある。爺さんに似なくて幸いだと真司は思ってしまう。

母さんに似たという少し吊り上がった目で真司を捉えると、零は少し不機嫌そうになる。

「む……。姉さんじゃなくてお姉ちゃんって呼んで！」

かわいらしく膨れながら真司に近づいた零は、いつまでも呼び方を

変えてくれない真司の両頬を手で軽く引っ張りながら言う。

真司としてはいい加減諦めて貰いたいのが本音である。

痛くないとはいえ、引っ張られ続けるのも嫌なので、彼女の手を優しく握って頬から手を離してもらおう。

「でも、俺にとって姉さんは姉さんだから」

「うっ……。また、お爺ちゃんと稽古してたの？」

真司がその小さな体に合った道着を着ていることに気付いた零は、心配するような、咎めるような声音と表情で尋ねてくる。

とりあえず呼び方には納得したようだが、零は男の真司が強くなるうとするのに反対のようだ。

零自身が争うのが苦手な性格なのも理由の一つなのだろう。クラスで一番強い女の子のグループにちょっかいをかけられても無抵抗で我慢しているくらいだ。

両手を握り返し、自分より低い身長の実司を見下ろしながら言う。

「稽古なんてやめたらいいのに。真ちゃん可愛い格好とか似合うんだから……」

「（俺って特徴が無いから映えるだけなんじゃ？）姉さん、普通と違うかもしれないけど、俺は好きでしてるんだよ？　普通と違う俺は、嫌いかな？」

一般的な男の一部みたいに、自分を可愛く見せて女の子の気を惹こうという考えは真司にはない。そして、普通の子供にしては異常に大人びていることを自覚しているし、隠す気はない。

周りからどう思われようと自分は自分のままでありたいという意志を乗せて、真司は零を見上げ、見詰める。

「う、ううん！　私は真ちゃんのこと大好きだよ！」

勢いよく首を左右に振り、一生懸命否定してくれる零は微笑ましい。うれしかったのか、真司も目元と頬を緩ませる。

「うん。俺も大好きだよ、姉さん」

真司の言葉を受け、顔をまともに見た零は顔を赤くして、パクパクと口を開けては閉じている。

真司はその様子に首を捻り、「恥ずかしかつたのかな？」と自己完結する。第三者からすれば、かなりの齟齬が生じているのは丸分かりだろう。

「姉さん？」

「うう〜……」

「あらあら、どうしたの〜？」

俺の背後から婆さんがやってきた。いつまでも玄関で騒いでいたから気になったのだろう。

「な、何でもないよ!? き、着替えてくるね？」

零は婆さんが来たことに驚き、自室へと駆け込んでいく。廊下を曲がって姿が見えなくなると、何かにぶつかり痛がる声が聞こえたが、滑って転んだのだろう、またバタバタと足音が遠のいていく。

「あらあら、お邪魔だったかしら〜？」

「? 別に邪魔じゃなかったよ。」

微笑ましそうな婆さんの問いを真司が否定すると、ちよつと呆れられてしまった。その上、「鈍感なままじゃだめよ〜」と怒られるが、真司には理解できないようである。

婆さんもまだまだ幼い孫にはまだ理解できないだろうと諦め、夕飯を仕度するために台所へと行ってしまふ。

後には、疑問で頭が一杯の真司だけが取り残された。

「……別に問題ないよな？」

今日は土曜日である。

週休二日制になっているので、学校はお休みだ。

この世界では、義務教育は小学生から高校生までなので、真司は幼稚園に通っておらず、いつもと同じ日でしかない。

零は遅くまで寝ていたが、真司は爺さんに叩き起こされていつもの鍛錬をしていた。この頃の真司は、鍛えすぎて背が伸びなくなっただろうしようと不安に思っている。

女が強い世の中に喧嘩を売るような家系の血がしっかり受け継がれているのか、普通の5歳児には決してできない程の苦行（山をひたすら駆け廻ったり、ただただ武術の型を繰り返したり、爺さんに組み手でボロボロにされ続けたり）に今日も耐え抜いた真司は、居間（修復済み）の畳の上で倒れていた。

このままお昼ご飯まで寝て過ごすつもりのようなようだ。

そんな時、起きたばかりですと主張している恰好で零が起きてきた。顔は洗ったようだが、目がシヨボシヨボしている。

「ふああああ……。お婆ちゃん、お爺ちゃんおはよ……。……」

どうやら先に爺さんたちと会ったようだ。昼食の匂いに惹かれたのだろう。

「おはよう。あらあら、お寝坊さんね。もう少しでお昼御飯だから、居間で待っててね。」

「おはよう。学校での疲れが溜まっていたのじゃろうな。儂も学校は窮屈で仕方なかったからの……。……」

「わかったあ……。……」

爺さんが昔を語りだす前にその場から退散した零は居間へと向かう。台所で二人が盛り上がっているの、ご飯が完成するのは予定より遅れるのは決定だ。

働くのを拒否している頭でテレビでも見ようと考える零はおかしなものを見てしまう。

「ん……。……ん？ し、真ちゃん!？」

居間に入った零の視界に入ったのは、畳の上で力なく倒れている真司だ。大好きな弟が朝から倒れているのだ。さすがに眠気が吹き飛んだ様子である。

駆け寄って安否を確認する。

「し、真ちゃん！ 大丈夫!？」

「……ん？ あ、姉さんか。おはよう……」

「あ、おはよう……じゃないよ!? どうしたの?」

「ん、疲れただけ……」

「そ、うなの? よかった……」

その返事に、真司を心配していた零は安堵したが、突如むくれだす。

「む……!!」

「どうしたの?」

「お爺ちゃんやりすぎ! もっと真ちゃんのこと考えてよねっ!」

どうやら、真司が疲れ果てた原因となる爺さんの指導方針に不満を持ったようだ。今にも爺さんに怒鳴り込んでいきそうである。

「真ちゃんも、もっと加減してって言えばいいのに!」

文句も言わずに従っている真司にも怒りの矛先が向けられた。

真司がうつぶせの状態のまま、首だけを零のほうに向けると、よれよれの可愛い動物のパジャマを着た零がプリプリ怒って、腰に手を当てている姿が視界に映る。ついでに、長い髪の毛もボサボサだ。

本人としては精一杯怒っているのだろうが、全然怖くない。むしろ可愛いので、幼い子供でなければ微笑ましくなってしまうだろう。

「真ちゃん! お姉ちゃんは怒ってるんだよ! 何で笑うの!？」

真司も例に違わず微笑んでしまったようだ。零からすれば反省するどころか何故か笑われたので、怒りがヒートアップする。

真司は苦笑に変えて体を起こし、胡坐をかいて畳の上に直に座って謝るが、反省の色は全くない。

「ごめん。姉さんが怒ってるのは分かるけど、かわいいから怖くないよ」

パジャマ、着替えたら?」

その言葉に零はきよとんとしたが、自分の恰好を確認するなり顔を赤くして、居間から全力で駆け出す。

「真ちゃんのパカー！」という声と慌しい足音がドブプラー効果で聞こえそうだ。

昼食を終えると、零は真司を連れて街へと繰り出した。

いつも家や山で過ごしている真司のことを思つての行動である。まあ、少しは姉らしいところを見せたいという打算もあったのだろう。爺さんや婆さんが小さい子供だけで出歩くのに渋ったが、零が「二人だけで大丈夫！」と自信満々に何度も言つて渋々認めた。

爺さんが真司にちゃっかり「何かあつたら、この携帯で助けを呼ぶのじゃ！」とメツチャ真剣に告げていた。

普段からそうであればいいのに……

「だからこそその爺さん、かな……？」

街から離れたといつても、賑やかな中心部から離れているだけなので、住宅地が近く、子供だけでも比較的安全である。

零は特に目的を持たず、街がどんなところかを探検するかのようには歩き回る。人通りがとても多い中心部には行かず、道に迷わない程度に真司の手を引いて歩いていく。

二人ともあの家系の血が流れている上に、自然に近い環境で育っているの、その探検ごっこをあまり疲れずに楽しんでた。

色々なことに感心した様子を見せる真司に、零もご満悦だ。頭の中では、真司の中の零の株が急上昇だと考えているに違いない。

だが、とある公園で休憩しようと考えたのが間違이었다。いや、ある意味正解だったのかもしれない。

公園には、ごつい体格の見るからに強そうな女の子を中心としたグループが先に居た。

学校で零にちよっかいをかけているグループだ。

後に真司が知らされた話では、その女の子は空手を習っており、県大会で一位の実力だったらしい。

武術を習っている女性が力を誇示するのもこの世界ならではの厄介なことに巻き込まれる前に引き返そうとした零だが、先に取り巻きの一人(男の子)が零と真司に気付いた。

「あれ？ 天裂だ」

「天裂？ へ〜……」

リーダー格の女の子

仮称ちびゴリラとする

が零と

真司を視界に入れると、にやりと笑って取り巻きに指示を出す。

それを聞いた男女の取り巻きは二人を囲んでちびゴリラの前に連れて行く。うん、どう見ても不良集団にしか見えない。

「よぉ〜天裂、奇遇だねえ」

「そうみたいです。私たちは急いでるんで、帰ってもいいですか？」

零は明るい様子と打って変わり、暗くて静かな感情が薄くなった様子でちびゴリラに対応する。

真司からすれば知らない姉に見えるが、ちびゴリラ達にはいつものことなのだろう。フンツと鼻を鳴らして顔をゆがめる。

「相変わらず弱いくせに生意気だねえ……。誰が偉いのか今日こそは教えてやるのか？」

言って、ちびゴリラは取り巻きに合図を送り、零の腕や肩を掴ませ、動きを封じさせた。

その様子を楽しげに見ていたちびゴリラは零に近づき、殴りかかるうとする。が、その眼前に誰かが割り込んだ。

真司だ。

自分の姉を守りたいという考えを実行。零に背を向け、ちびゴリラに相対する。

しかし、真司は零の前から動かない。

ただ、気負いもなく立っているだけだ。

理由は勿論ある。真司は爺さんに鍛えられているとはいえ、実戦経験はない。つまり、自分がどれだけ強いのか分かっていない。姉を助けたいが、下手に攻撃して相手をよけいに怒らせるわけにはいかないと考えた真司が導いた答えは、

「殴るなら代わりに俺を殴ってくれませんか？」

身代わりだ。

その答えが意外だったのだろう。ちびゴリラはきよとんとしたが、真司の言った言葉の意味を理解した途端笑いだす。

「あっははははは！ 天裂！ いい男見つけたじゃないか？ 弱いお前の代わりに殴られる男なんて、どこで見つけたんだい？」

取り巻きに抵抗していた零も真司の行動に驚いて動きを止めていたが、ちびゴリラの問いに意識が戻って、慌てて真司を説得しようとする

「真ちゃん！？ ダメだよ！ 危ないよ！」

大好きな弟が自分のせいで殴られるのは嫌なのだろう。必死に呼びかける。

対する真司は落ち着いている。何故なら、

「（爺さんと比べれば像と蟻みたいなものだしなあ……）どうです？ 見せしめに俺を殴るといのは？ それで今日は勘弁してほしいんですが？」

真司が再度自分を身代わりとする交渉を持ちかけると、ちびゴリラは何かおかしいのか再び笑い出す。その様子に、零だけでなく取り巻きも目が点になる。

「くくつ、あんたガキの癖に面白いじゃない。どう？ 天裂は放って置いて私と仲良くしようじゃないか？」

「後藤さん！ こんなガキを相手にすることないですよー！」

「黙りな。で、どうする？」

取り巻きの一人が騒ぎ、他の奴らも同意するが、ちびゴリラ（後藤さん？）が黙らせる。こいつら本当に小学生なのだろうか？ どのヤンキー集団だ？

「あー、すみません」

ちびゴリラの意外な提案に、思わず気を抜いた真司は後頭部を片手で？きながら告げる。

「あなたに興味がありません」

誰もが沈黙し、ピューツとタイミングよく風が吹いて去っていく。

真司の目の前にいるちびゴリラは俯き、肩を震わせている。もちろん、怒りで。

「ふ……ふざけんじゃねえー！！」

そこに技はなく、ただ怒りで我を忘れたように腕力だけで殴ってくる。

利腕っぽい右腕を振り上げ、背の低い俺に振り下ろすようにして殴る。

続いて左腕。

再び右腕。

それを繰り返す。

俺も鍛えているとはいえ、5歳の肉体なのでその攻撃を受けてしまう。真司以外の人からすれば、ちびゴリラの連打は全てまともに入っているように見えただろう。

何度か攻撃されている内に落ち着いてきたのか、技を用いた一番強い拳打を真司の腹に当て、真司は零たちに当たらないよう後方へと吹き跳んだ。

それを追いかけて、ちびゴリラが真司に近寄る。

零の悲鳴が公園に響き、止めるように懇願するも、ちびゴリラは歩みを止めない。

そんな背景を無視している真司の目には雲の少ない青空が広がっており、「いい天気だ」と場違いにも思っているときに見てしまった。赤い球形に見える光の塊だ。小さい光が徐々に近づいて大きくなってくる。ふわふわ、そよそよ、ゆっくり真司の近くへと近づいていく。その光が、真司の足より下、つまりちびゴリラの方へと風に流されて移動する。そして、その光がちびゴリラに触れるかと思われた瞬間

「ダメー!!」
零だ。

取り巻きを振り解いた零が、ちびゴリラの左後方から勢いよくぶつかり、ちびゴリラから見た右前方、真司の左足元に突き飛ばした。零はちびゴリラが直前まで立っていた所で手について倒れている。

赤い光が、零に触れた。

光は弾けて零に降り注ぐ。まるで、祝福するかのように……

「あ、天裂！ てめえ……!!」

「触らないでっ！」

ちびゴリラが突き飛ばされたのに驚いた取り巻きは、一拍遅れてちびゴリラと零に駆け寄る。

そして、その内の一人の男の子が零に掴みかかろうとするが、零はそれを拒絶するために振り払う。

強く、吹き飛んでしまえという意味を乗せて……

「へっ？ あ……げふっ!？」

振り払われた取り巻きの男の子は5mは軽く吹き飛んだのではないだろうか？

吹き飛ばされた本人は何が起こったのか分からず、地面に背中から着地して呻き声を上げている。

その様子に、上半身を起こした真司と起き上ったちびゴリラ、そして取り巻き共は何が起こったのか理解できないでいる。

「（……）さない許さない赦さないいい気味消える壊れちゃえ死ん

……ひ、だり手？

今にも飛び掛かってしまいそうな零の歩みが、突如止まった。

……誰かが、私の左手を握っている？

左手に今までなかった、あるはずのない抵抗を零は感じた。

何かの力で強化されている零にとって簡単に振り払えるほどの小さな抵抗だが、それを無視することは何故かできなかった

「姉さん、こっち向いて」

真司が零の左手を握っていた。

零の変化に驚きはしたものの、すぐ落ち着いた真司は零を振り向かせるために呼びかける。

今の零を放って置いてはおけない。

「ああ、駄目だよ……」

「姉さん……」

零は真司の姿を見ない。

「私には、やることがあるんだから……」

「姉さん」

零は真司の声を聞かない。

「だから、待ってて……」

「姉さん！」

零に真司の言葉は届かない。

「すぐ、終わ」

「零……！」

届け！

真司は力を込めて叫ぶ。

姉を、零を間違わせないために。

今まで感じたことのない気配を滲ませる真司の声に、零がビクッと

体を竦める。

ゆっくりと、ぎこちなく、恐れながら、左手を握る相手 真
司へと振り返る。

いつの間にか零からは、鬼気も、真司の目に映っていた赤い光も、霧散して消えている。

そして、二人の視線がぶつかった。お互い、相手の目に自分の姿が映っている。

零は真司に恐れを抱いた。

真司は零に激怒し……悲しんだ。

零は視線を外したかったが、外せなかった。眉を上げた真司の睨みつけるかのような鋭い視線が、零の視線を外させない。

零はいつもと違う真司に恐れを抱き、震えて泣き出しそうになる。何か言おうとするも、意味を成さない言葉しか発せない。

「え……あ……しん……ちや……？」

「零、今何をしようとした？」

「……う……あ……あ……ああ！？」

「何をしようとした！」

「……ご……めん……ごめん……なさい……」

真司の言葉に、零は己の過ちに、己が罪を犯さんとしたことに気付く。

大好きな弟が止めてくれなかったら、あのまま大嫌いな奴の所へたどり着いたら、零は零のままではいらなかっただろう。

静かな公園に女の子の涙声が広がる。

……もう、自分を見失った鬼はどこにもいない。ただ、怒られて泣く子供がいるだけだ。

零は顔を俯かせ、ただただ謝り、涙を流し続ける。流れ続ける涙を手で擦り、拭おうとするが、目元を赤くするだけで止まらない。真司は内心で焦っていたため、止まってくれたことに安堵した。

仮に、零の暴走が止まらなければ……真司は全力で零の敵になるつもりだったのだ。勿論、零のための行動なのだろうが、それを見た零がどのような反応をするかを考えると……顔を上げ、手を伸ばし、自分より年上の子供の頭を撫でる。

「姉さん、もうあんなことしないでね？」

「……うん。うん！ もう、じま、ぜんっ！」

「……うん。俺はいつもの姉さんが好きなんだからね。『力』に、『拾い物』に飲まれないでね？ 約束できる？」

零は泣きながらも一生懸命頷き、それを見て苦笑を浮かべた真司が撫で続けながらお願いする。

もはや、どちらが年上なのか分からない。

特に、真司の外見と雰囲気が一致しない。

「……うん。約束、するっ！」

「うん。なら、俺も約束するよ。約束を守る姉さんのことを信じ続けるし、助けるから」

「……真、ちゃん。それ、普通の、男のセリフ、じゃない、よ？」

「じゃあ止めるところか？」

頭を撫でられたままの零は女が強い世の中に反する真司の約束を疑問に思い、首を傾げる。

それについては真司もおかしいのだろうとは思っているが、間違っているとは考えない。

零は目から手を離す。もう、涙は止まったようだ。

「……うん。約束しよ？ 私も真ちゃんを助ける！ 指切り、しよ？」

こうして、姉と弟は約束を交わした。二人だけの秘密の約束を……

「帰ろ、姉さん？」

「うん！」

真司は帰ろうとして零に手を差し出すと、零も真司に手を伸ばして

しっかりと握りしめる。

「……あ、後藤さんどうしよう?」

そのまま帰ろうとしたが、近くで気絶している後藤ちびこに気付く。

二人以外に反応する人がいないと思えば、気絶していたわけだ。白目を剥いているのでとても怖い形相になっている。それに、公園に後から来た人がいたとしてもあの状態の零を見れば即Uターン、いや、Vターンしただろう。

「罰として放って置こうよ。」

「……うん、そうしようか。あ、真ちゃん! 怪我は!？」

「大丈夫。ちゃんと避けて逸らしたから直撃してないし、怪我もしてないよ。」

零が殴られていた真司を心配するが、手を引いて家へと向かいながら真司が話す。

真司が言うには、相手の攻撃を受け流したり、ベクトルを逸らすようなこと(中国武術で言う化勁もどき)ぐらいできないと爺さん相手に持たないらしい。そのおかげで今回は助かったのだろうが……
……どれだけ容赦がないのやら……

日が傾き、空が朱く染まっていく中、姉弟は手を固く結んで家路へと歩みを進める。

二人の歩いた後には、幼い笑い声と長い影が残り、消えていった。

「(急所を狙えば……、投げて関節を……) いや、まだ無理か……」

「真ちゃん?」

「ん、何でもないよ。早く家に帰らないとね」

「……お爺ちゃん、怒るかな?」

「(……俺が怒られるんだろうな)」

家に帰ってからのことを考えると、思わず溜め息を吐いてしまう二人であった。

春の公園で拾いモノ（後書き）

ありがとうございました。

夏の川で拾われモノ

今日も今日とて苦行の日々、真司は道場の床の上に倒れている。

「ハア……ハア………（クソッ！）」

「ふむ……」

木でできた堅い床は仰向けに倒れた真司の汗で濡れており、黒くシミが広がっていく。本人はまだ心の中で悪態をつくだけの元気はあるようだ。

そんな孫を見下ろし、祖父は思案する。

その姿はあまりにも無防備に見える。真司がただの元気のいい子供ならばその不意を撃とうとしただろうが、そのまま体力を回復させることを優先したようだ。

「（相変わらず、隙が見えない……）」

爺さんは男だが、あまり世の中を知らない真司でさえ、世界で上から数えた方が早いだろうと思ってしまう程の豪傑だ。

というか、これ以上の強い存在がいる可能性を考えたくない……

「真司、今日はもう終わりじゃ。しっかり体を休めなさい」

「はい。それにしても……、いきなり暗器なんて使わないでよ」

そう、今回の組手では途中で先の丸い鉄の棒のような、尖っていない棒手裏剣のような暗器が使われた。

爺さんが言うには訓練から実戦まで使える暗器らしく、先が尖っていないのは隙をつくるのが目的であり、刺さった相手に再利用されるのを防ぐためらしい。「打ち方（投げ方）次第で貫通させることもできる！」とは本人の談。

「不意を打つための暗器じゃろうが。これもまた鍛錬じゃ！」

真司の不満を一喝してうやむやにしようとする師匠。

「誤魔化すな」

すかさずツッコみを入れる弟子。

「刺激じゃよ、刺激。分かるじゃろ？」

「分かるけどさ……」

いつも同じ相手と同じように戦っては強くなることはできないが……真司はまだ5歳だ。

本人も一般的なら歳の男の子とは全く違うことを認めているが、それでも幼すぎる。

もはや、鬼畜を通り越して外道の所業である。

大いに手加減された素手同士の組手でさえまともに相対できていないのに、暗器まで使われると真司から仕掛けることはできないだろう。

「あまり刺激にはならなかったようじゃがな。 見えておつたろ」

残念な様子から打って変わり、問い詰めるかのように今の弟子に問う。

組手で使われた暗器は全部くらっていた真司だったが、爺さんには自分の抜き打ちを見て避けようとしたことがわかったらしい。

誤魔化すことはできないし、初めから隠す気はなかった。

「十分肝が冷えたよ……。 何となく、ね。でも、爺さんも俺が避けようとするのに合わせてきたよね？」

諦めたように真司もそれを認めたが、自分の師匠はそれ以上の理不尽な存在だと言外に告げる。

「あたりまえじゃ！ 儂を誰だと思つとるか！」

「……はいはい」

相変わらず自信満々な爺さんを雑にあしらう。

真司の呼吸はとっくに落ち着いていた。体も、痛むが動けるまで回復している。

視線だけを道場の窓の向こうに移す。

空は青く、高い。空を泳ぐ白い雲が体を大きくして自己主張している。

蝉の鳴き声がうるさいが、風情を感じさせる。

太陽の光が眩しく、上と下からの熱によって肌を焼く。

視線を天井に戻すと古い木の茶色ばかりで、人の発する熱気が外へと逃げずにこもっており、息苦しく感じる。

噴き出る汗が鬱陶しい。

「……なあ、爺さん」

「何じゃ？」

「俺って……いや、何でもない。今日も暑いね」

まだ床に倒れたままの真司は、天井をぼんやり見つつ自分の祖父に何かを尋ねようとしたが、思い直してその考えを否定する。

「……そうか。とりあえず、風呂にでも入ってこい。いや、いつそ川で体を冷してくればどうじゃ？ 俺も夏の間はよく川の中で寝たものじゃ……」

何を誤魔化したか追及はしなかったが、汗だくの真司を見て川に行くことを提案してきた。

「スイカじゃないんだから……」

そう言いつつも、魅力的な提案だと思ったのだろう。真司は立ち上がり、道着のまま外に出ていこうとする。

「あ、道場の掃除……」

「ああ、今日はいいわい。俺が簡単に済ませておく」

「……了解。じゃ、俺は川に行くよ」

真司は少しふらふらになりながらも道場から外へと歩いていく。開け放った扉から見えた空は本当に青かった。

道場から川に直行するかと思われた真司は家に入っていく。川は山の中にあるので、さすがに途中で倒れかねないと判断したのだろう。台所に寄って麦茶を入れた水筒を一つ入手し、ついでに大きめのタオルも一枚持っていく。途中で会った婆さんに川に行くことを告げ

ると、

「あらあら、（動物とか昆虫に）気を付けてね〜。お昼までには帰るのよ〜」

何やら含みのある言葉をかけられた。子供に対するお決まりの挨拶だろうと思っていたが、山へ入る一步目を踏むと同時に思い出した。「……そっぴや、猪いたんだっけ？」

現在、真司は川へ向けて山道を散歩している。普段（追い掛け回されて必死に）走破している山を歩いて（走るより）ゆっくり進む真司の五感に、気付かなかったことや無視してきたモノが刺激を与えてくる。

山道は木々が太陽の日を受け止めた木の葉によって、地面に光と影の不思議な模様を描いていた。上を見上げれば所々日の光が漏れて眩い。

木霊だろうか？ 小さい何かが木の上につつすら見えることもある。手を振れば驚かれて消えた。

風が吹き抜けることで蝉だけでなく、木の葉のカサカサと擦れる音も聞こえる。

涼しげな風が川に近づいていることを知らせる。

さらに近づけば、水の跳ねるような、水同士がぶつかるといふような、川という名の一つの巨大な生き物がそこにいるような音が聞こえてくる。

「街にそれなりに近くて、山も川もある。家は（古いけど）デカいし、綺麗な姉さんと親代わりの婆さんがいる……俺って案外贅沢者なのか？」

ふと、思いついた戯言をつぶやくが川の音に流されて消えていった。それを聞き届ける人間も誰一人いない。

静か……いや、穏やかだ。

《静か》と表現するのは、この場所で生きているモノたちに失礼だ。

人間の社会がとりわけ騒がしいのだから。

大きい川とは言えないが、十分に雄大で荘厳で……優しい場所だ。

「……涼みにきたのに何で黄昏てんだろ、俺」

真司は自分が何しに来たのかを再確認する意味合いで独り言を呟く。正直、この景色と空気に触れただけで満足してしまったが、ここで帰るといふ選択をするとは何か負けた気がするのだ。

少し歩いて移動する。他の場所と大きな差はないが、ちょうどいい浅さ（・・・）の砂利と小石が敷き詰められた比較的柔らかそうな所を見つけたのでそこで足を止めた。緩やかな流れがあるが、子供用プールのように寝れば沈むくらいの水が溜まっている。

上の道着だけ脱いで風に飛ばされないように重石（タオルと水筒）を乗せておく。下は足が素足になっただけで道着ままだ。帯をしっかりと締め直している。

真司が下だけ道着のままにしたのは、パンツだけで入れれば水を吸って重くなるためずり落ちるだろうと考えたからだ。全裸という選択肢は最初からない。

普段子供らしくない真司だが、先程からわくわくと表情を少しずつ輝かせている。好奇心旺盛な子供の様に川の中へと向かう。

その足取りは軽い。

足の裏で石を踏み越え、砂利に沈み、踏み固め、蹴る。足の指が不安定な足場をしつかり掴み、バランスを崩させない。

すぐに流れる水の側へと到着する。

足を止め、一息入れる。そして、再び前へと進む為^{ため}に脚を上げて、

下げ 全身が動きを止めた。

真司は足先を水面に浸けた状態で止まってしまった。いや、少しずつ水面下へと片足を沈めているようだ。

「……う、わ、あ、あ、あ……冷てえ」

一文字ごとに体に力が入り、目を強く閉じて眉も歪められる。だが、口は笑みを浮かべており、口の端を上げて大きな弧を描くにつれて歓喜の感情がどんどん漏れているようだ。

簡単に言えば、かき氷で頭がキーンとなった時にテンションが上がる人のような反応だ。大きな笑みを浮かべたまま目を見開くと、水面を荒らして全身を鎮めるように飛び込んだ。が、浅いのですぐに起き上る。

「あはははは、ははははは、ははははは、冷たーっ！」
真司は嬉しそうな声を上げて笑っていた。

満足するまで笑って楽しんだ真司は目を瞑り、浮力に体を任せて仰向けに寝ていた。岩がいい感じに影をつくっており、ゆったりしている。

といつても、意識は起きたままである。さすがに流れが緩くて浅いといつても寝たら死ぬだろう。

今は川の中央よりの先程より深めの所にいる。少し流れに乗って下流側へも移動した。

ここら辺は全体的に浅いが、子供の真司には深すぎる場所もある。今は寝ている所は体の半分くらいが沈む場所だ。

浅い所より少し速い流れを感じるが、水面下に置いた大きめの石に足の指をひっかけて流されないようにしている。

真司が大人しくなったので、再びここで聞こえるのは水音、風の音、葉や虫の羽が擦れる音、鳥の鳴き声くらいだろう。

目を開ければ道場で見た青く高い空が周りの木々や葉によって縁取られている。

太陽の位置も徐々に高くなってきた。

家を出たのが9時か10時くらいだったから正午ではないだろうが、真司にこれ以上一人で水遊びを続ける気はない。

ずっと聞き続けている川の中の音も、変化はないので飽きてきたよ
うだ。

川で冷やされるスイカの気持ちも堪能したし、そろそろ帰ろうかと、頭の中で考えてもいるが、

「このまま溶けて流されそう……」

口から出るのはそんなふやけた声だけだ。

目も再び閉じており、岩に引っ掛けた足の指以外はさらに脱力している。

何故か諦観したような、本当に溶けて消えるならそれもありだといふような表情をしている。

勿論、ただの戯言でしかなかったのだが……

「ダメー!!!」

と何か小さいものが近くに、いや、真司の腹の上に着弾した。

真司の戯言を本気で受け止めたのだろう。その声は必死だった。

ドバツチャゴボバ！ と色んな音が連続してごちゃ混ぜになったような音が真司には聞こえた気がしたが、考える間もなく意識を失った。

薄れゆく意識の中、泣きそうな目で真司に女の子が見えた気がした。

街に複数在る小学校の一つに通っている桐ヶきり（が）丘優陽おかゆうひは両親に連れられて川に遊びに来ていた。

父親が休暇を取って帰ってくるなり、「明後日川でバーベキューするぞー!!!」と言い出したからである。

以前にも同じ計画が立てられていたが、父親の働く会社の新入社員がちよつとしたトラブルを起こし、休日入社しなければならなかったため頓挫したのだ。

「ごめん、本当にごめん！ 父さん、部下のピンチ救ってくる！」
そう言うなり颯爽と駆け出した父親は優陽の目にカッコよく映っていたが、楽しみにしていたお出掛けがなくなってしまう涙ぐんだの

を優陽は覚えている。母親はそんな優陽の頭を撫でて慰めてくれた上に、内緒で食べに行ったケーキは美味しかったのですぐに機嫌は直ったが……

ちやうど寝ようとしていた優陽は今にも寝そうな様子から一転、嬉しそうな声で父親に「本当!？」と尋ねた。

父親が微笑みながら頷けば、「やったー!」と小さく跳ねて喜びを表現する。

「ああ、美貴さん……優陽が……優陽があんなに喜んでくれているよ。上司を脅してまで有給とって良かったよ!」

「そうね。でも……脅したって、何かしら?」

「ははは、ちよつと貸りを返してもらっただけだよ。あれ? 美貴さん、どこに連れて行くのかな? 首が苦しいんだけど……」

「正悟せいごさんにはちよつとお話があります。 優陽? 一人で寝れる?」

優陽は父親の襟首を掴んで家の奥へと向かおうとする母親の問いに力強く答えると、二階の自室に駆け込んで布団を頭で被った。

早く明後日になることを願いながら……

翌日の朝、父親がひどく疲れた様子で、母親が艶々していたのは蛇足である。

桐ヶ丘一家の車が山道を走っている。ミニバン型の車だ。

初めて通る道なのか、比較的ゆっくりと一本道を走っていく。

剥き出しの地面は狭いが、一般の車道と比べての話であり、車一台が走るには十分な広さがあった。

そして、山道を走り続けると川が見えてきた。川辺で車を止めると、ジャリツと石同士が噛み合う音が聞こえ、次いではしゃぐ子供の声が聞こえる。

「やっと着いたー！　うわ〜……きれ〜……」

飛び出すように車から降りた優陽が見たのは、人の手が全く及んでいない自然そのままの姿だった。

住んでる所に近い川とは景色も空気も違うので感動している。

「優陽、気を付けないと転ぶわよ？　それにしても……、どこに行くのかと思えば私有地じゃない。」

優陽を軽く嗜めた母親が、周りの風景を見てから父親へと視線を移した。

そこには、得意げな顔で運転席から降りた父親の姿があった。

「許可は取ってるの？」

「あはは、許可なしでここには来れないよ。昔の変わった友人がこの土地の持ち主の息子なんだ。そいつの親父さんとも知らない仲間じゃないし……。いや〜、持つべきものは友達だね！」

「ああ……だから正悟さんも変わってるのね。　　優陽、あんまり遠くへ行っちゃ駄目よ！」

「はあーいー！」

いつの間にか離れていた優陽は、元気に返事をして不安定な足場を進んでいく。時に、よじ登るようにして一生懸命上流側へと向かっていく。

「ああ、一人で大丈夫かな？　姿は見えるけど、心配だなあ……」

「大丈夫よ。今の優陽は喧嘩は弱いみたいけど、優しく強い子なんだから。」

その目には優陽への信頼が溢れているようだった。

この世界でも、母は強し、ということなのだろう。

まだ心配そうな父親へ、「信じてあげなさい。」と笑いかける。

「正悟さんはバーベキューの準備をお願いね？　お腹空いたわ」

「……うん、美貴さんの娘だもんね。きっと（喧嘩も）強い子になるよ」

優陽はここにあるものが全て目新しく感じられた。

水も石も木も葉も空も太陽も鳥の鳴き声も、いつも鬱陶しく思っていた蝉の鳴き声さえ、今まで知らなかったかのように新鮮だった。今一生懸命に上流の方へ移動しているのも、上の方がよりこの自然を堪能できるのではないかという根拠のない自己判断によるものだ。しかし、優陽は女の中でも弱い方であり、つい最近七才になったばかりである。

「はあ……はあ……つかれた……」

つまり、体力なんてものはたかが知れていた。

ただの平地ではなく、石や岩まである場所なので、より体力が消費されるだろう。

しかし、この子も頑張ったもので、最初についたところよりも高い場所　川に少しつき出した形の大きい岩の上で休憩していた。

階段のように、なだらかな斜面を形成している部分があったので子供でも上れなくはないが、そこに着くには子供の足では少し遠いだろう。

でも、きれいな場所……

周囲をぐるりと自然に囲まれ、溢れる音が優陽へと向けられているような錯覚を得る。

今の優陽は、さながら自然のオーケストラの指揮者だろうか、それともただ一人だけの観客だろうか……

感動し、目を輝かせている優陽は、おもむろに目を閉じて深呼吸を始めた。

深く、深く……

まるで自分を自然に溶かしていくように

……パチャン……

ふと、水の跳ねる音が優陽の元に届いた。

急に聞こえた音に驚いて目を開け、周囲を見回す。

落ち着いたことでやっと気付けたというのが事実のだろうが、優陽には些細な違いだ。

この下……川の中？　もしかして、お魚さんかな？

そんな期待をもって岩の影あたりを覗きこんでみると、何故か上半身裸の男の子が浮いていた。

「！！？」

思いもよらない遭遇に、優陽は声無き悲鳴をあげる。

え？　え？　どうしようどうしよう？

と、混乱していると、男の子が口を開いた。

「このまま溶けて流されそう……」

「（えっ……？）」

その言葉を、優陽は真剣に受け止めた。

つい先程まで、自分も自然と一体化しようとして試みていたも同然だったのだ。優陽は、本当に目の前の男の子が消えていくように感じてしまう。

「ダメー！！」

体が勝手に動いた。

男の子を助きたい一心で、自らも川へと飛び込んだ。

勢い余って、無防備な男の子に向かって飛び込んでしまったために、大変よろしくない音がした。が、優陽は気付かない。

ぶつかる瞬間瞑った目を開けば、男の子の意識もなくなっている。

溺れるほどの水深はなく、非力な優陽でもなんとか水面上に引き上げられたが、そこからどうしていいのかわからない。

ぐしゃぐしゃな顔と頭で必死に考える。

「（こんな時、どうしたら……！）」

思い出したのは、過去の会話。その断片

『おかーさん。あたしもにんぎょさんみたいにうみのなかでいきで
きかないの？』

『そうね、泳げない優陽が海に潜ったら、きっと溺れちゃうわね。
ブクブク……って。』

『し、しんじやうの……？』
『大丈夫よ。もし優陽が溺れても、お母さんが助けてあげるから。』
『どうやって？』
『人工呼吸……ううん。キスでね』
『きすつて……ちゅー？』
『そうよ。お母さんとチューは嫌？』
『う、ううん！ そんなことない！ おかあさんすきだもん！』
『ちよつと二人とも！ 僕だって……』

そっだ！

閃き、実行する。

躊躇いは一切無かった。

そして、優陽は初めて会った男の子に口付けた。

「（お願い！ 目を覚まして！）」

優陽は目を瞑り、強く願い、さらに唇を唇を押し付ける。

……反応がない。

優陽は目を恐る恐る開く。もしかしたら、と思いつつ。

しかし、願いは叶わなかった……男の子は目を覚まさない……

「な……んで。なんでダメなの！？」

私じゃこの子を助けられないの！？

助げたいのに……目を開けて欲しいのに……

とうとう泣き出した優陽には、これ以上どうにもできない。

このまま時間が過ぎようとしていたが

「優陽！ どうしたの！？」

騒ぎを聞きつけた母親が駆けてきた。足場の悪さを感じさせない速さだ。

後ろの方には、もたついている父親の姿もみえる。

「ひっく……ひっく……お母、さん……この子、助、けてえ……」

川の中から場面は移り、現在地は車を停めた川辺である。バーベキューの準備が父親の手によって進められている。完成するまでもう少しといったところだろう。

溺れた(？)男の子は車の座席に寝ている。

「う、ごめんなさい……」

「私に謝ってどうするの。この子が目を覚ましたらちゃんと謝りなさい」

男の子は気を失っているだけのようだった。

水もほとんど飲んでいなかったので、命に別状はない。

優陽は母親には叱られて悲しくなり、キスをしたことを思い出して恥ずかしくなり、父親には本当の人工呼吸というものを教えられて落ち込んだ。

「……はい」

「あ……この子、天裂の家の子かな。　　気絶させたのがこの子でよかったね」

いつの間にか、男の子を観察していた父親が能天気そうに重大なことを呟いた。

父親の発言に母親は絶句した。優陽はキョトンとして首を傾げている。

天裂という家は、桐ヶ丘一家が今いる山の地主だ。

こうして川に遊びに入る許可をもらっている側としては最悪の状況と言っても過言ではないはずなのに、この父親の余裕はどこから表れているのだろうか？

「よくないでしょ！」

ドグシャアアアア……！　　という何故か優陽にも聞こえる擬音と共に、父親が吹き飛んだ。

右手を高く振り上げた状態になっている母親によって吹き飛ばされたのだ。

腰の入った、グーで。

バツシャアアアン！ と父親は（浅い）川に墜落した。

「がっ……ぼ……びべ……」

「あら、まだふざけたことを言うだけの元気があるみたいね？」

笑みを浮かべ、スタスタと足早に溺れる父親へと近づいていく母親。その目は愛しの旦那を見る目をしていなかった。

そんな母親の後ろでは、娘の優陽が恐れ戦いている。

「ちよっ……！ ま……待って……話、聞いて……」

溺れながらも、（妻によつて）命に関わると悟ったのか、急いで立ち上がって話を聞いてもらおうとするが、すぐ足にきて膝を着く。

先程のダメージがずいぶん深刻なようだった。

「……何かしら？」

その言葉は、「最後に何を言い残すのかしら？」と父親には聞こえていただろう。

暑いのに震えてしまう体を抑えつけ、できるだけ笑顔（引き攣っている）で、早口で説明する。

「天裂家って変な家系でね、昔から男が女より強くなるよう鍛えられているんだ、現当主のお爺さんは修行馬鹿というかマニアみたいなところがあるし、だから事情を話せば逆にこの子が油断してるからだー修行不足だーって怒られると思うんだ！」

「……何それ？」

急にそんな話を聞かされても信じがたいのだろう。

母親の怒りは収まったようだが、困惑している

「……その話が本当でも、この子を傷つけてしまったこちらに非がないわけではないでしょうがー！！」

と思いきややっぱりまだ怒っていた。

むしろ、ヒートアップしているようだ。

「ごめんなばばば」

川の中で土下座を実行する父親。

頭が水面下に沈んでしまったため、セリフの後半は何を言ってるのか分からない。

「……もういいわ」
そんな父親を呆れたように見ると、車の方へと歩み始める。
状況の分からない父親は土下座を続行中だ。

扉を開いたままの後部座席には男の子が寝たままだが、その隣には優陽がいた。

心配そうな、すまなさそうな、情けなさそうな、複雑な表情をして男の子の様子を見ている。

そこに母親がやって来た。父親は傍にいない。

「優陽、そんな顔しないの」

「でも……」

私のせいだから……

言葉にはしなかったが、母親にはそう伝わった。

優陽は自分を責めているのだろう。

「うーん……」

父親のように気にしないのは大問題だが、優陽のように気にしすぎるのも問題だと母親は考える。

あの父親の話のように天裂家の人が問題にしないか、やっぱり問題になるのか……今の段階では分からない。

「（まずは、この子に謝ってからよねえ……）」

母親は男の子を見て、次いで娘に視線を移す。

突如、クスツと母親が笑う。楽しそうに、まるで悪戯を思いついたように。

優陽の耳元へと口を寄せ、

「初チューは気持ちよかった？」

ブツ！ と噴出し、優陽は母親へと勢いよく振り向く。

だが、パクパクと口を開閉するだけで、何も言葉を発せず、顔も真っ赤になっている。

母親にそれを指摘されると、パチンと両頬に手を当てる。同時に、

川の中でキスした時のことを思い出す。

「（そ、そうだ。あ、あ、あたし……）」

男の子へと視線を向け　　ポンツと頭から湯気がでた。

実際には出てないはずだが、隣の母親にはそれがはっきりと見えた。熟れたトマトのように真っ赤に染まった娘を見て、ご満悦のようだ。

「そ、う、ね。気絶させたのは悪かったけど、女の子の唇は安くないわよねえ？」

優陽はもういっぱいいっぱいで、母親の言葉が理解できていない。

「……あ……」

ビクツと優陽が縦に揺れる。

寝ていた男の子が小さく声を発したのだ。

身動きし、今にも目を覚ましそうな男の子を前に、優陽は盛大に慌てた。

「（どうしようどうしようどう……と、とにかく謝って、）」

「優陽、その子が起きたらこうしなさい」

優陽の視線の先にいた母親は小悪魔のような笑顔をしていた。

「……あ」

真司は意識が体と繋がったことを頭の片隅で理解した。

自分の五感内四つが外からの刺激を伝えてくる。

風や水の流れる音、鳥や蝉の鳴き声、話し声が聞こえる。口の中が

苦く、不味い。ちよっと埃っぽく、水っぽい臭いもする。堅くて柔

らかい人工物に寝ている。

視覚だけ繋がらない。

まだ瞼が閉じたままな上、目を開くのが億劫なのだ。

「（こんなじゃ、爺さんに怒られるな……）」

俺を叱りつける爺さんの姿を思い浮かべながら目を開くと、低い天

井が見えた。狭い室内、いや、車の中にいるようだ。

「（誘拐……じゃないとは思うんだが……）」
混乱する頭で現状を理解しようとする。

「（場所は川のままだ。俺は川で寝ていて……何故か気絶した？

いや、気絶させられたんだ）」
切り替える。

周囲を警戒し、何が起ころうともすぐに対処できるように意識する。
最悪、この不利な状況を自分一人で打破することも考え、覚悟も決める。

体をゆっくり起こす。と、後部座席の扉が開かれており、二人の女性を認識した。

一人は笑顔の大人で、一人は真っ赤な顔で何か覚悟を決めたかのような子供。

どうやら一般人の家族のようなので、警戒を解き、安堵した。

そして、何があったのか話かけようとして

「あ、あたしのセンゾクドレイにしてあげる！ 感謝しなさい！」

「……………は……………？」

何で？

夏の川で拾われモノ（後書き）

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3903z/>

神様が落としまして.....

2011年12月13日16時45分発行